

研究主題「互いのよさを認め合い、運動する意欲をはぐくむボール運動の指導の工夫 —バスケットボールにおける技能の向上と 言語活動を重視した仲間との豊かなかかわりを通して—」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課
渋谷区立広尾小学校 主幹教諭 坪倉 一雄

I 研究のねらい

1 研究主題設定の理由

中央教育審議会の答申（平成20年1月）では、「運動する子どもとそうでない子どもの二極化」「子どもの体力の低下傾向が依然深刻」「運動への関心や自ら運動する意欲、各種の運動の楽しさや喜び、その基礎となる運動の技能や知識など、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分に図られていない例も見られること」等が挙げられている。

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育成するためには、一人一人の技能を向上させることはもとより、仲間とのかかわり合いを豊かにし、仲間とともに考えたり工夫したりして、運動する楽しさや喜びを味わわせることで、児童の運動への関心や運動する意欲を高めることが大切であると考えます。運動する意欲を高めることにより、児童は家庭においても、また地域の中でも、生涯にわたって、いつでも、どこでも、誰とでも運動に親しむことができると考える。また、仲間とのかかわり合いを豊かにするためには、集団的活動や身体表現などを通じて他者と伝え合ったり、共感したりする言語活動の充実を図ることが大切であると考えます。

本校は都心に位置し、校庭が狭いため、思い切り強くボールを蹴ったり、打ち返したりすることができない。都心部には、このような学校が少なくないが、このような学校でも、校庭にはバスケットボールのリングが常設されていることが多く、休み時間にバスケットボールをして遊ぶ児童の姿も多く見られる。

そこで、本研究では、バスケットボールを取り扱い、ボール操作の技能の向上とボールを持たないときの動きや攻防の仕方を理解し身に付けさせる過程で、言語活動を重視し、仲間との豊かなかかわりを通して、仲間とともに考えたり工夫したりして練習やゲームに取り組みせることとした。このことにより、児童が互いのよさを認め合い、運動する楽しさや喜びを味わうことで、運動する意欲を高めることができると考え、本研究主題を設定した。

2 研究の仮説

バスケットボールの学習における「ボール運動の指導の工夫」をし、自分のよさを伸ばすことができれば、チームで認められるようになり、練習やゲームをする楽しさや喜びを味わうことができ、運動する意欲をはぐくむことができる。

（バスケットボールの学習における「ボール運動の指導の工夫」とは）

- ・ 一人一人のボールを操作する技能の向上
- ・ ボール操作にいたるためのボールを持たないときの動きと攻防の仕方を身に付けさせるための工夫
- ・ 言語活動を重視した仲間との豊かなかかわりを通して、チームの中での認め合いや教え合いをさせるための工夫

II 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 「バスケットボール」の学習における身に付けるべき技能について

新学習指導要領、各種答申、文献及び先行研究から「バスケットボール」の学習における身

に付けさせたいボール操作の技能を整理し精選した。また、技能、態度、思考・判断の内容別に賞賛や励まし、技能のポイントや動き方の言葉かけについて整理した。

(2) 「バスケットボール」の学習における「言語活動」について

中央教育審議会の答申（平成20年1月）における「体育、保健体育」の改善の基本方針では、体を動かすことが情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや、筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動などを通じて論理的思考力をはぐくむことにも資すると

バスケットボール における言語活動	声かけ	・認め合いの声かけ ・賞賛や励ましの声かけ
	教え合い	・ボール操作のポイントのアドバイス ・動き方の指示、確認
	話し合い	・チームのねらいやルール等を決める ・チームの作戦を立てる

ある。体育においても言語活動を充実することが重要であり、本研究では、言語活動を上記のように整理した。

2 調査研究

(1) アンケートから

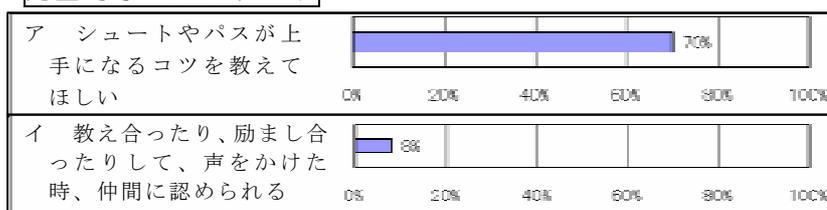
ボール運動における教員と児童の意識について、平成21年9月、都内公立小学校21校の教員約160名と5、6年児童約2,000名を対象に実態を調査した。

(児童対象のアンケートより)

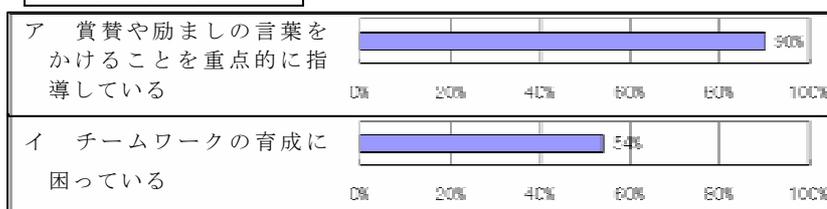
ア 「先生にどんなことをしてほしいですか」の問いに、70%の児童が、「シュートやパスが上手になるコツを教えてほしい」と望んでいることが分かった。

イ 「バスケットボールをやっている、どんな時に仲間から認められていますか」の問いに、教え合ったり励まし合ったりして、声をかけた時」を選んだ児童は10%に満たない。

児童対象のアンケート



教員対象のアンケート



(教員対象のアンケートより)

ア 「ゲーム・ボール運動の指導で、重点的に取り組んでいるもの」の問いには、90%の教員が「賞賛や励ましの言葉をかけている」と回答している。

イ 「ゲーム・ボール運動の指導で困っていると感じていること」の問いには、50%以上の教員が「チームワークの育成に困っている」ことが分かった。

(2) 考察

「シュートやパスの技能を身に付けるコツを教えてほしい」と考えている児童の割合が高いことから、シュートにつながるためのボール操作の技能を向上させる指導の工夫が必要であると考えた。また、教員は「賞賛や励ましの言葉をかけて」指導を重点的に行うなど、声かけの意識が高いが、児童は「仲間との励まし合い、教え合い等の声かけ」に対する意識が十分では

ない。児童一人一人の技能の向上を図る過程において、教え合いや賞賛、励ましの有効な言葉かけを理解させ、言語活動を重視することで、互いのよさを認め合い、仲間とともに運動に楽しく取り組み、運動する意欲をはぐくむ必要がある。

3 開発研究

(1) ボール操作の技能の向上に向けた工夫

毎時間、シュートの技能を高めるために、また、シュートゲームの中で仲間同士が「声かけ」や「教え合い」をするために「30秒間シュートゲーム」を設定した。

「教え合い」では、身に付けさせたい技能のポイントを明示するために「技能ポイントカード」と「言葉かけカード」を作成した。一人一人のシュートの技能の変容を分かりやすくするために「30秒間シュートゲーム」でのシュート数と成功数を記録するカードを作成した。

学習過程の前半では、個人のボール操作の技能の向上を図る練習の時間として「レベルアップタイム」を設定した。また、ゲームを振り返り、チームでボール操作の技能の向上を図る練習の時間として「パワーアップタイム・Ⅰ」を設定した。

時	1	2	3	4	5	6	7	8	
学 習 内 容	オリエンテーション等の試みのゲーム等	30秒間シュートゲーム							
		●レベルアップタイム			●ボールキャッチタイム				
		●ゲーム〈前半〉			●ゲーム〈前半〉				
		●パワーアップタイム・Ⅰ			●パワーアップタイム・Ⅱ				
		●ゲーム〈後半〉			●ゲーム〈後半〉				

図1 学習過程における技能の向上のための手だて

(2) ボールを持たないときの動きを身に付けるための工夫

学習過程の後半では、ボールを受けるための動きを身に付ける練習の時間として「ボールキャッチタイム」を設定した。また、チームの課題に応じて、攻防しながら「ボールを持たないときの動き」を練習する時間として「パワーアップタイム・Ⅱ」を設定した。

(3) 言語活動を重視し、仲間と豊かにかかわり合うための工夫

児童がチームの仲間と豊かにかかわりながら、個人やチームの課題を解決できるようにするため、また、児童一人一人が自分のよさやチームのよさを知り、「声かけ」「教え合い」「話し合い」ができるようにするため、以下のような手だてを設定した。

ア 児童に身に付けさせたいボール操作の技能を明示し、仲間同士で「教え合い」ができるように「技能ポイントカード」を作成し、掲示資料として活用できるようにした。

イ 児童がゲーム中にボールを持たないときの動きを身に付けるために「教え合い」をし、互いのよさを認め、賞賛や励ましの心情をはぐくむための具体的な「声かけ」の例を示した「言葉かけカード」を開発し、「教え合い」や「声かけ」の参考にできるようにした。

ウ 毎時間、仲間同士で「話し合い」ながら、学習を振り返り、賞賛や励まし、教え合いの言葉かけを中心に「ステップアップ学習カード」に記録させ、有効な「教え合い」や「声かけ」を実感できるようにした。

Ⅲ 研究の結果と考察

平成21年11月から12月にかけて、都内公立小学校第6学年（22名）において、バスケットボー

ルの授業を行い、開発研究の有効性について検証した。

1 ボール操作の技能の向上に向けた「30秒間シュートゲーム」の有効性

「30秒間シュートゲーム」のカードの記録を分析した結果、シュートをした数と入った数のどちらも多くの児童が増えていた。また、シュートの成功率を学級の平均で分析した結果、学習が進むにつれてシュートの成功率が高まった。

仲間同士でシュートした回数を記録し、シュートの様子を見合うことで、技能が高い児童の動きの特徴を知り、理解することができた。また、仲間同士で教え合うことでシュートの技能が高まった。

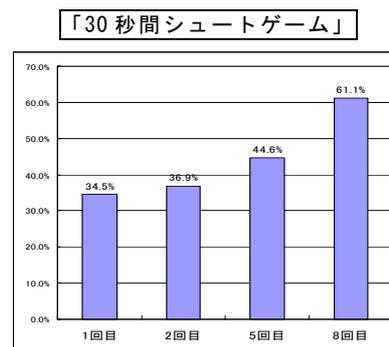


図2 学級のシュート成功率 (平均)

2 ボールを持たないときの動きを身に付けるための学習過程の工夫

「ボールキャッチタイム」を設定し、ボールを受けるための動きを理解させ、練習を通して身に付けさせたことにより、ゲームにおいて攻撃のとき、初めはボールを持たないときにどう動いたらいいのか分からず、仲間や教員から指示されても動けなかった児童が、ボールを持っている児童と他の仲間の位置を確かめ、考えながら動くことができるようになった。

「パワーアップタイム・II」では、「ボールキャッチタイム」で学んだことを生かして、チームの課題を考えさせたことにより、ボールを持たないときの動きをチームの課題に設定し、3対1や3対2の攻防を練習する姿が見られた。

「ステップアップ学習カード」の振り返り欄には、「守りの人がいないところを見つけて動き、パスをするように声を出すことができた」、「ボールが自分のチーム側にあるときは、三角形を意識して動くことができた」等の記述が見られた。これらのことから、児童がボールを持たないときの動きや攻防の仕方を理解し身に付けることに有効であった。

3 言語活動を重視した仲間との豊かなかかわりのための「言葉かけカード」の有効性

練習では、チームで「話し合い」、考えた作戦を成功させるために、動き方を伝えたり、タイミングを合わせたりする姿が見られるようになり、ゲームでは点が入れば仲間とハイタッチし、ともに喜び合い、運動に楽しく取り組む姿が見られた。仲間へのアドバイスや自分へ向けられた言葉を振り返り「ステップアップ学習カード」に記録させたところ、「『ナイスシュート!』の励ましがやる気につながった。」などの記述が見られた。「言葉かけカード」の言葉を参考に「声かけ」や「教え合い」をするなど言語活動を重視したことで、運動への意欲が高まり、思考・判断しながら積極的に練習やゲームに取り組む児童の姿が見られた。

IV 今後の課題

1 主として、自己の課題解決に向けて運動に取り組む領域における言語活動の充実

器械運動・水泳等、主として、自己の課題解決に向けて運動に取り組む領域において、思考力、判断力、表現力等をはぐくみ、運動する意欲を高めるための言語活動の充実について追究していく必要がある。

2 小学校6年間にわたる言語活動の系統性

ゲーム領域・ボール運動における、小学校低・中・高学年の系統性をふまえた、言語活動を充実させる意図的な手だてや支援の工夫について追究していく必要がある。